5　竹内栖鳳　薫風稚雀・寒汀白鷺　対幅

昭和三年（一九二八）　絹本着色　本紙各一五一・三×五一・三

右幅では、初夏の爽やかな風に枝を揺らす柳に、二羽の雀がとまってにぎやかに鳴き声をあげている。柳の木には釣り竿が立て掛けられ、その下に魚籠（びく）も見えることから、水際の情景であることがわかる。対する左幅は、うち捨てられた舟に一羽の白鷺がとまり悠然と羽を繕っている。枯れ果てた葦が寒々しさを引き立てる冬の河岸である。雀、白鷺とも竹内栖鳳（一八六四～一九四二）が好んでしばしば描いたモチーフであり、写生を第一義としていた竹内らしくその姿は実にいきいきとしている。

竹内は、幸野楳嶺に学んだ円山四条派の写実的な画風を基礎としていたが、明治三十三年にパリ万国博覧会を視察するため渡欧した折、ターナーやコローの風景画をはじめ、マネ、セザンヌ、ルノワールなどから多大な影響を受けて帰国した。そして西洋画の描法や空間表現を積極的に学習し、伝統的な円山四条派の画風を大胆に展開した。本図においても、柳の幹の描写には付け立て法やたらし込みといった日本画の技法を用いているが、大幅に筆を省き、ザックリとしたタッチの重なりで幹の姿と質感を表す点はむしろ印象派の手法を思わせる。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸
三の丸尚蔵館展覧会図録No.50

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections